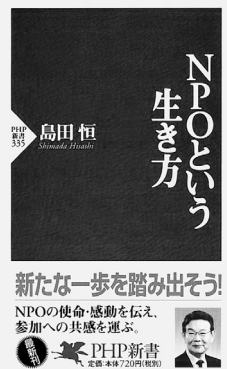


# NPOという生き方

島田 恒 著



PHP新書、2005年2月発行、  
本体価格720円

【主要目次】  
NPOの感動と活力  
■第1部  
現代社会とNPOの役割  
(私たちはいま、どこにいるのか—経済突出社会の現実豊かさの再構築)  
■第2部  
成功の原則・失敗の原則—NPOの運営  
(NPOの成功とその基本原則  
NPOの失敗とその予防装置)  
■「もう一つの生き方」へ踏み出す

読み終えた後に、さわやかな余韻が残る。その余韻は、本書は著者の「自身の体験」と「自分の思い」から書かれたこととから来るのだと思う。「はじめに」から「終章」まで著者の思いや筆致にふれることがない。それが清しく読後感の爽快感につながるのだ。NPOはミッションを軸に据えるということ、ミッションに始まり、ミッションに終わるといふ、そのことが本書を貫いているからである。

☆☆☆

著者はNPOを「民間によつて自主管理されており、利益配分することなく、独自のミッション達成のために機能している組織」と定義している。NPO法人に限定せずに任意団体であってもNPOと広くとらえている。とはいえ、NPO法人自体が相当な数に達している現在、NPOやNPO法人も様々あることは事実だ。過去には、設立にお金がかからないので株式会社代わりにNPOとした例、企業の別働隊として働く例、名前の社員（企業で言う社員ではなく議決

権を持つ人）が連ねる例、補助金獲得が目的となった例、など枚挙に暇がないといえればいいすぎだろうか。

しかし、と著者は「たった一人の難病の子ども」の夢をかなえるための活動をしているNPOを紹介し、公平を原則とする行政ではできないけれど、NPOなら「たった一人」の子どもの夢をかなえるための活動ができるという。NPOの中には700人を超す難病の子どもたちの夢を実現させてきたところがある。このNPOにとつてそれがミッションであるからだ。つまりミッションとは組織の目的であり価値観であり、最上位の理念であると著者は説く。このような著者の姿勢は評者には気持ちが良い。もとより組織運営や事業資金確保などに苦手なNPOが多いことも承知している。よく言われることは、NPOやNPO法人はミッションが先行してミッション倒れになるという指摘であり、ミッションをいかしていくために、組織のマネジメントや活動資金が必要であることを否定する

間にはNPOであることを忘れて競争原理の中で揺れているのもまた事実である。自らがよつて立つところ、これを忘れて経営第一になることを評者は危惧するが、著者は組織にとつてミッションは「根源的な使命である」と明快で評者の心配など軽く吹き飛ばす。著者は阪神淡路大震災に遭遇して、たくさんボランティアが駆けつける場面に遭遇した経験からだろうか。

☆☆☆

経済至上主義の社会からNPOの集う多元社会、「もうひとつの社会」を築くことをめざしている。著者はもともと大手企業で長く過ごしてきたという。それだけにNPOと企業とどこが違うのか、何故NPOなのかという思いが強く行間から感じられる。  
本書は第1部がNPOとは何か、ミッションについて語り、第2部では「成功の原則・失敗の原則」というタイトルで運営について述べているが、運営手法と

いうより「あるべき姿」の紹介といったほうがいいのかもされない。エーリッヒ・フロム、ドラッカー、テンニース、ウェーバーと例は引くが、本論はあくまで著者の目を通して語られるNPOというものの提示である。そのためこれらの引用した人の名前を知らない者にとつては少々説明が足りないと感じるかもしれないが、NPO論のテキストではないので読み飛ばしてもよいと考える。

☆☆☆

NPOという生き方がある、NPOという行き方もある、と語りかける著者の声が聞こえてきそうだ。それだけにボランティア、NPO経験のない人たちに読んでもらいたい。

## ●評者プロフィール

東島弘子（ひがしはた ひろこ）

福祉ジャーナリスト  
社会福祉士（新宿区社会福祉士会会長）

経歴：  
日本社会事業大学大学院博士前期課程修了。国際医療福祉大学大学院博士課程（医療福祉経営学分野）在籍。

主著：  
「介護保険制度における福祉用具貸与事業」2006年、中央法規、「介護保険で利用できる福祉用具」2008年11月、岩波書店など。